

第2回初級養成講座 講座概要

2. 「富士山はご神体！それって何？「須走」の富士講と御師を探求しよう」

第1部「富士講とは？」

- 日時：平成29年11月12日（日）13時～16時
- 場所：富士浅間神社 社務所
- 講師：宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教 管長



■講義概要

1. 扶桑教とご神体の富士山

- 江戸富士講は、「江戸市中に八百八町あり 八百八講あり 講中八萬人」と言われたほど、賑やかに富士山詣でを行っていた。ここに「布まねき」があるが、本来は「板まねき」である。御師の家の玄関に入った所に講社名が書いてある板まねきが置いてあった。御師は講社が来るときに「まねき」を玄関に飾るのは、今でいう旅館の「歓迎〇〇様」というものと同じであり、同時に布まねきを持って、御師の所に置いてきたものだった。
- 多くあった江戸富士講を明治15年に一つの神道教団としてまとめたのが現在の神道扶桑教である。初代扶桑教の管長宍野半（ししのなかば）が江戸富士講を一つにまとめて教団とし、明治天皇の勅裁を賜り独立した。
- 山へ登るときの姿は、白装束。いまだに白の木綿と決められている。神様の元へ行く、対峙するのだから純真無垢であるべき。上位も下位もない皆平等だ、気持ちは真っ白、簡素で質素でという意味で白装束である。
- 菊池喜一郎（4代目歌川広重）が書いた「江戸風俗往来」という本の中に富士講について書いてある。
- 江戸末期から明治にかけて、江戸の風俗を書き示したものに「道中の辛苦よりは登山の艱苦（かんく）を嘗（な）めるは、冥利冥加を弁え、身の奢侈（しゃし）をつつしむなどの実地修業なり」と書いてある。「心中また種々の禁制ありて、心の穢れを清む。六根清浄の御山の有難きを覚ゆるとかや」色んな禁止事項を守りながら心の穢れを清めて、六根清浄を唱えながら御山に登り、いろいろな困難を悟りなさい、ということ。登山旅装についても書いてある。「質素にして勇ましき出で立ちなり。白木綿の行衣、手甲脚絆にわらじを履き、はちまき、名玉を連ねた数珠をたすきにつけ、すげ笠は講中の印をつけ、金

剛杖をつきたるなり。肩より掛ける鈴の音はさながら不浄を払いて響く」

—鈴は、クマ除け。また霧がかかっていると、声を通らない。大声を出さなくてよく、疲れないので必ず持って行く。「脚絆は3里で結べ」と言われた。疲れたら、結び目をきつく結ぶ。あと必ず半紙を畳んで懐に入れる。山の上でご不浄（トイレ）をするときは、半紙を敷いて、その上にする。「御山は神様、神様のお体に直接引っかけるのは失礼だから、紙を一枚引きなさい。」神様のお体の中に我が身を委ねさせていただくのだから失礼がないように、との気持ちであり、今でも形として残っている。

—私が昔登っていた頃、早稲田の宮元講、井田先達だけが草鞋で登っていた。そしてご不浄が心配だからと朝からお茶を飲まなかった。遊山ではない、神様の御体に我が身を投じている、ということを私たちは学ばせていただいた。昨今、少なくなったが、私達の登拝は出来るだけ、古い姿で一つの祈りの姿を伝えていきたい。

2. パワーポイントを見ながらの解説

1) 富士登拝映像

—今年、世田谷の本庁「富士山太祠」から登拝出発の儀式。白い箱の中には、角行様が謹製された御神實（御神鏡）が入っている。これを八合目の天拝宮というお宮に1ヶ月間奉安する。お供するという意味で「供奉登拝」と言う。

—角行様が修行をした人穴（世界構成資産の1つ）の内部。角行様は、ここで、つま先立ち千日の修行をおこなったと伝えられている。この映像は真ん中に角行様のお墓があり、講社の先達が角行様を慕って、周りに自分のお墓を建ててほしいという願いで建てた記念墓である。

—北日本宮へお参りをする。富士吉田市上吉田が扶桑教立教の地、富士山元祠に参拝する。元祠から上がると御山が見えるという位置関係。そして吉田の御師大国屋に泊まる。

—7月17日に小御嶽神社（五合目）に参拝し、八合目、昔の七合五尺の烏帽子岩の所に天拝宮がある。ここに、1ヶ月間、御神實（御神鏡）がお鎮まりになる。

2) 資料写真解説

—剣ヶ峰で撮った集合写真

—富士吉田市にある明治9年に御師の皆様と建てた扶桑教立教の地。今もある施設「富士山元祠」である。

—頂上には「金明水」と「銀明水」があり、昔ここで水を売っていた。写真の手前が金明水。後ろに見える石で積み上げた所が昔の天拝宮である。昔は毎年頂上に行くたびに崩れていた。ブルドーザーのない時代に毎年のように修繕をするというのが大変で、できなくなり、明治15年に今の八合目の元祖室（身禄堂）と呼ばれている富士道第六世の食行身禄様のご入定された（ミイラになった）所に降ろして、天拝宮にした。

・烏帽子岩。富士山は毎年山が崩れている。その山で、450年以上動いていないのがこの岩であり、昔の人のパワースポットになっていたと思う。烏帽子に似た岩なので烏帽子岩。また、日本武尊さまが登られたときに烏帽子を置いて休息されたとして聖跡になっている。食行様が頂上で御入定されようと思ったが、山役人に追い立てられた。ご頂上でそのような不浄な行為（断食して死ぬ）をされると天変地異が起こると困るとして役人に反対された。頂上での御入定を断念し、烏帽子岩のふもとでお座りになって31日間、1日1椀のお水で過ごされた。お供の者（田辺十郎衛門）に、一日一節の言葉で伝えた「三十一日の御巻」は江戸富士講の一つのバイブル。人はこう生きなければならない、神様はこうである・・・と31日間口伝を残した。

—御入定なさった所が身禄堂と呼ばれているが、そこに天拝所を降ろした。天拝宮の内陣の真下に身禄

様の亡骸が今も安置されている。頂上のお鉢(噴火口)の底が八合目だと言われている。八合目からまっすぐ拝むとちょうど正面で神様(お鉢の底)と対峙できる。だから、頂上に上がると神様を上から見下ろすことになると言って八合目から上に登らない講社もあった。

—江戸富士講は三幅のお軸を背中に背負って持って上がる。頂上に上がって軸に風をかざす。これを神様のお息をかける、と言う。風は富士の大神様の息である。リフレッシュ=再生をしたお軸を持って帰り、登れなかった人の為に神様の息吹を伝える。

—御神語、角行様が神様からいただいた御唱え言葉。「こうくうたいそく みょうおうそくたい じゅっぽう こうくうしん」漢字は今の漢字ではない、創字である。意味は、こうくう=吐く息吸う息 たいそく=我々が吐いた息をどうぞ神様お吸い上げ下さい、神様が吐いた息をどうぞ我々にください みょうおう=神様と私たちは一緒になることが出来る、神人合一の境地に立つことが出来て じゅっぽう=広く大きくその神様の力が広がっていく ということを願う、という意味である。私たちが富士山に登らせてもらって感じることはブレス=息、呼吸が大切であるということ。「六根清浄」と唱えながら登る。声を出さないと山酔い(高山病)になる。自分の息を、おもいきり吐き出す。そして、力を抜くと自然に空気が体内に入ってくる。「神様が空気をくださるからそれを吸いなさい。」と言われて山へ登った。

3. 富士講という組織について

—富士山は昔、噴火をしていたから、人々は恐怖と畏敬の念をもって、自然の強さを感じた。そこに我々日本人は大いなる力を感じたに違いない、それが信仰に繋がるという事はごく普通のことだ。

—講には、講長がいる。講長は講全体を管理する役割である。みんなでお金を掛け合って資金を集める。講はお金を扱う所であるので、信用ある人が講長となる。先達と講長は異なる。

—先達とは、登拝の経験豊かなリーダーのことである。先達は、7回、頂上に登ると御中道修行(五合目を一周するコース)が許される、3回中道を回ると先達号をもらえた。御中道修行を終えると、宝冠の許しを得られる。現在、大沢が崩れて、通行不可能なので御中道修行ができないから、宝冠の許しは得られない状態である。

—同時に世話人と呼ばれ、色々お世話をする人がいる。そして講員がいる。「講」とは、誠にパブリックな組織で、公の組織なので、当時の出納帳等がきちんと残っている。公金だから決算報告もちゃんとやっていたということである。

—講は江戸町民の助け合いの中から生まれた仕組みであり、同時に御山に登れない女性、子供、高齢者の「願いを神様に届けるんだ。」という大いなる使命感を持って御山へ登っていた。そのためにお山に行かれない講員や町内の皆様から預かった大切なお金を使わせてもらって行くので、公式な使命を持って強い覚悟を持って行ったということである。